

ファイナリスト「良い経験」



ジャクソン国際バレエコンクールでファイナリストになった畑戸利江子さん＝米ミシシッピ州ジャクソンで（畑戸さん提供）

米ジャクソン国際バレエ 金城学院高卒の畑戸さん

バレエ界の若手登竜門とされる米国のジャクソン国際バレエコンクールで、岩倉市出身の畑戸利江子さん（20）が、シニア女性部門のファイナリストになった。入賞は惜しくも逃したが、二十二日夜（日本時間二十三日午前）の授賞式の直後には、本紙の電話取材に「思い描いた表現はすべて出し切った。良い経験になった」と声を弾ませた。（植木創太）

畑戸さんは、五歳からバレエを始め、小学一年生から千種区の教室「シアトル・ド・バレエ・カンパニー」校長の塚本洋子さんに師事。東区の金城学院高校を卒業し、昨年八月からは米フロリダ州マイアミを拠点にする。

同コンクールへの挑戦は、ジュニア部門に出場した前回に続き二度目。自由演技の「コンチンポラリー」は、他の出場者が有名振付師による演目を踊る中、自

らの振り付けで臨んだ。最終選考の自由演技で踊った演目「フィーリング・グッド」は、恋をしている同世代の女性の気持ちを表したといい、「振り付けはまだ勉強中だけど、他の出場者も『いい演舞だったよ』と言ってくれた。とても自信になった」と話した。

七月からは米テキサス州の著名バレエ団に所属することが決まっている。「ここまで来られたのは家族や友達、先生のおかげ。大きな舞台上で主役を張れるようなバレリーナになり、恩返ししたい」と意気込んだ。演技を現地で見守った母の智江さん（50）は「会場からは『ビューティフル』『ア

メージング』と歓声が上がっていた。結果に関して本人には悔しさがあるかもしれないが、最高の演技を見せていたと思う」と話した。金城学院高三年の時に担任だった宮本令子さん（50）は「教室ではもの静かな生徒だったけど、舞台上立つと華があり、オーラが出ていた。（コンクールを機に）ますます活躍してくれれば」とエールを送った。

コンクールはモスクワ、バルナ（ブルガリア）と並ぶ世界三大バレエコンクールの一つ。四年に一度、米南部ミシシッピ州ジャクソンで開催される。十日に開幕した今回は、サンフランシスコ在住の清沢飛雄馬さん（20）＝長野県松本市出身＝がジュニア男性部門で銀賞を受けた。